

都市は劇場であり、劇場は都市である

劇場都市

vol.

12

2023

G

Takasaki Culture Event
Information Magazine
GEKIJOTOSHI

高崎市文化事業広報誌

公益財団法人
高崎財団
The Takasaki Foundation

都市は劇場であり、劇場は都市である

都市は、人生の喜怒哀楽が繰り広げられる舞台であり、都市そのものが劇場である
 そこで生まれる芸術文化は感動や創造性につながり、都市そのものを作っていく——
 「劇場都市」は、そこで生み出される文化芸術活動とそのドラマを紹介していきます

Contents

2 特集1

見て、聞いて、笑って楽しむ！
 身近な大衆文化・落語の世界

落語を聞く

群馬県出身の落語家

落語の基礎知識

Interview

古今亭 駒子

8 特集2

地域の暮らしに“声”で寄り添う
 コミュニティFM「ラジオ高崎」

12 公演情報

高崎芸術劇場
 2023年度公演スケジュール〈2023.10-2024.3〉

裏表紙 Meet The GSO Special
 群馬交響楽団 楽団員インタビュー vol.12
 コンサートマスター 福田 俊一郎

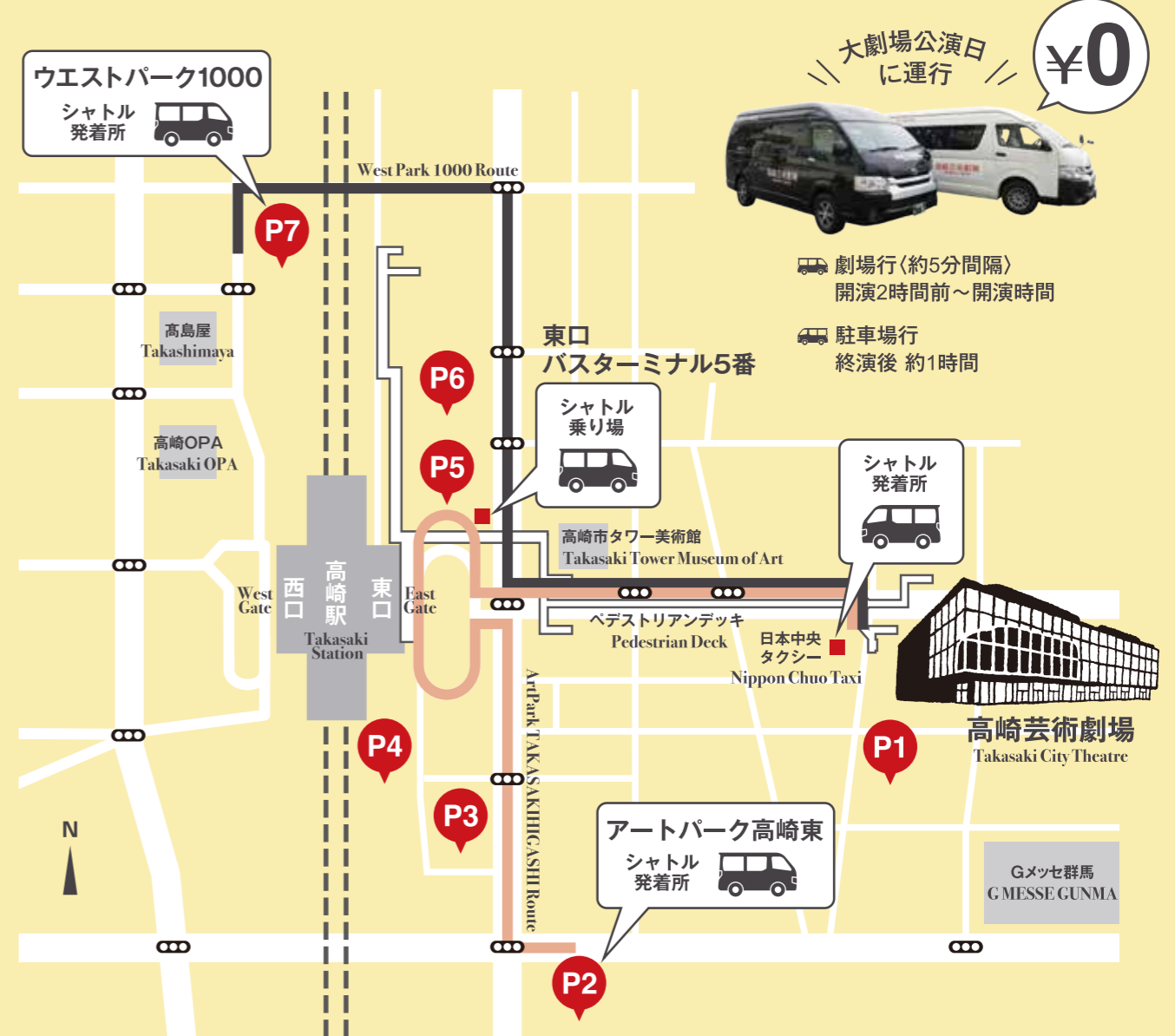
◀大劇場を象徴する、栗梅色のテラコッタタイルの壁面。
 栗梅色は、江戸時代から使われていた色彩で、「栗色の梅染」が略されたもの。

INFORMATION

（高崎芸術劇場）

近隣駐車場 & シャトルのご案内

高崎芸術劇場へお車でご来館の際は、近隣駐車場をご利用ください。『大劇場』での公演日には、劇場とアートパーク高崎東、ウエストパーク1000をそれぞれ往復する「高崎芸術劇場シャトル」を運行しています。アートパークルートは、高崎駅東口を経由します。ぜひご利用ください。



- | | | | |
|----------------------|--------------|-----------------------|-----------|
| P1 芸術劇場南駐車場 | 高崎市北双葉町1-3 | P5 LABI1立体駐車場 | 高崎市栄町1-1 |
| P2 アートパーク高崎東 | 高崎市双葉町1-12 | P6 ココパルク800 | 高崎市東町5 |
| P3 メディアメガ高崎 | 高崎市下和田町5-3-8 | P7 ウエストパーク1000 | 高崎市旭町34-1 |
| P4 高崎駅東口駐車整理場 | 高崎市八島町222 | | |
- 営業時間や料金など詳しくは、各駐車場にお問い合わせください
 ● 高崎芸術劇場に専用駐車場及び提携駐車場はありません

近隣駐車場・高崎芸術劇場シャトルについて、詳しくはWebへ▶



落語を

聞く



見て、聞いて、笑って楽しむ!

身近な大衆文化・落語の世界

「あはははっ!」

落語家の噺に、大きな笑い声此起彼伏。己の声と仕草、使う道具は扇子と手ぬぐいの二つ。これらを巧みに操り、会場の視線を一心に集める。

7月30日、吉井文化会館で行われた「よいい演芸館 夏公演 2023」。群馬県出身の真打・古今亭駒子さんや、高崎市出身でラジオ高崎の番組パーソナリティーを務める林家つる子さんが出演し、大入りの会場を楽しました。

老若男女問わず楽しめる大衆文化の落語。知れば知るほど面白い。今号では、意外と知られていない高崎との縁、落語の歴史、基礎知識などを落語家へのインタビューも交えて紹介する。

初代・三遊亭圓朝がつないだ落語と高崎

テレビ番組「笑点」で水色の着物を着ている落語家と言えば、三遊亭小遊三。実は彼の着物の紋は「高崎扇」という高崎に縁のある紋なのである。

幕末から明治にかけて活躍した初代・三遊亭圓朝という落語家があった。圓朝は、現・沼田市に実在した人物がモデルの「塩原多助一代記」、伊香保温泉や四万温泉などが出てくる人情噺「霧陰伊香保湯煙」など、群馬にちなんだ数々の落語を生み出した近代落語の祖でもある。天保10(1839)年



大河内家の『三扇』の紋「三つ雁木扇」で通称「高崎扇」と呼ばれている



初代・三遊亭圓朝の肖像
三遊亭円朝 著 ほか『円朝全集』
巻の一、春陽堂、大正15。国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1882378
(参照 2023-09-12)

に東京で生まれた圓朝には、高崎藩藩士の菩提寺「是照院」で住職をする義兄がいた。この「是照院」の紋だった「高崎扇」が義兄の思い出とともに深く心に刻まれていたのだろう。また扇は末広がり縁起が良いとされ、落語家にとっても大切な小道具の一つ。これらに起因してなのだろうか、自身の紋にしたと圓朝は高崎藩に申し出た。その願いを聞き入れたのが当時の藩主・大河内輝聲で、自身が着ていた羽織を贈ったという。

それがきっかけで、三遊派の落語家たちには高座に上がる際、「高崎扇」の紋付を着用している人がいる。「圓朝ゆかりの地・高崎」といわれるバックグラウンドには、そんな圓朝と高崎藩主の心の交流があった。

450年以上親しまれてきた落語と寄席のはじまり

落語は、日本の伝統的な話芸で、噺の最後に「オチ(サゲ)」が付くのが特徴である。歌舞伎や能といった伝統芸能と違って、落語は落語家が一人で何役も演じながら会話形式で噺を繰り広げ、身ぶり手ぶりだけで観客を魅了する。特別な衣装や舞台装置などもなく、演者の技巧と聴き手の想像力だけでいつの間にか噺の世界へと誘われていく、とてもシンプルで身近な芸能である。

落語の起源は、室町時代末期から安土桃山時代にかけて戦国大名に仕えてきた、「御伽衆」と呼ばれる人たち。彼らは学者や茶人、僧侶などであることが多く、大名の教養と娯楽のために話し相手になったり世情を伝えたりする役目を担っていた。

江戸時代に入り、銭を取って聴衆たちに噺を聞かせる「辻噺」や「屋敷噺」



「春色三題噺」
春遊家幾久編／一恵齋芳幾画 東京都立図書館蔵
幕末の三題噺全盛期に描かれた高座風景。三題噺とはお客さんに三つの言葉を出してもらい、その言葉を噺に登場させ一席にまとめること

が流行し、大阪では米沢彦八、京都では露の五郎兵衛、江戸では鹿野武左衛門などが活躍。こうして寄席が誕生したのである。人々の生活に密着している、大衆文化となった。

普段何気なく使っている言葉……。話を効果的に終わらせることを指す「オチ」や、最後に登場することを「トリ」、一番力量のある人を表す「真打」。数百年以上使われ続けているこうした言葉は落語にちなんだものである。

受け継がれる亭号屋号(流派)

亭号屋号とは、落語家の芸名(高座名)のうち、名字にあたる部分。林家や柳家のように「家」が付くものと、三遊亭、春風亭のように「亭」が付くものも多く、桃月庵、蜷気楼といったどちらも付かないものもある。入門した弟子は基本的に師匠の亭号屋号を名乗るが、まれに同じ一門の人がかつて名乗っていた芸名を継承したり、新しい芸名を名乗ったりする人もいる。

寄席とは

落語は主に「寄席」と呼ばれる場所で行われている。寄席とは、演芸が専門に行われている劇場、または演芸場のこと。落語に限らず、色物と呼ばれる漫才、手品、音楽漫談、曲芸など、バラエティに富んだプログラムが寄せ集まっていることが「寄席」という呼

び名の由来である。寄席の中でも、ほぼ一年中休みなく落語中心の興行が行われている場所を「落語定席」と呼び、都内では「上野 鈴木演芸場」「新宿末廣亭」「浅草演芸ホール」「池袋演芸場」が日々にぎわいを見せている。近年は二ツ目専用の寄席として「神田連雀亭」や「巣鴨獅子座」が開館。二ツ目が芸を磨く場として、特に落語通の間で愛されている。また、都内だけでなく各地域でも、演芸会や独演会といった地方寄席も開催されている。

寄席にみる高崎の歴史

『新編 高崎市史 通史編4』には、「これらの高崎の寄席状況について(明治)十年十二月の『郵便報知新聞』によれば、「芝居は田町の藤守座、新町の岩井座等にて皆樽を上げたり、寄席は七軒新紺屋町にハ軽業を興行せり」とあって、寄席の盛んな様子を伝えている(890ページ)とある。明治31年には、新紺屋町に松田亭(後に陸花亭)が設立され、義太夫、落語などの興業が催されたが、昭和の初めに閉館した。975ページには、大正九年四月に本格的な劇場として新紺屋町に高崎劇場が開業し、演劇、舞踊、寄席、音楽の他、各種大会に利用されたとある。後に映画が大衆娯楽の地位を確立すると、高崎劇場は、東宝映画劇場に生まれ変わった。

高崎での寄席は衰退をたどったが、



高崎まちなか寄席の様子
高崎まちなか寄席・高崎扇亭(2008年
全国都市緑化ぐんまフェア)

落語の灯は消えることはなかった。現在も本県から落語家や目指す人が出ていたり、落語会が行われていたりする。2008年には「全国都市緑化ぐんまフェア」の一環として、期間限定の落語定席「高崎扇亭」が開館し、大盛況を取めた。高崎芸術劇場や高崎シティギャラリーをはじめとする市内各地の施設で定期的に落語会などを開催。「シリーズ高崎寄席」と銘打って、過去には「新町演芸館」や「新春市民寄席」が、現在は「よいい演芸館」と「新録の会」が開催されている。

参考文献

- 「おはなし高崎人物伝」吉永哲郎
- 「三遊亭圓朝 永井啓夫」
- 「第25回 全国都市緑化ぐんまフェア 花と緑のシンポジウム」2008 公式記録 第25回全国都市緑化ぐんまフェア実行委員会
- 「新編 高崎市史」
- 「大衆芸能編 寄席」文化デジタルライブラリー
https://www2.tjia.go.jp/dlib/contents/learn/edc20/index.html(参照 2023-09-12)
- 「落語はじめての一步」公益財団法人落語芸術協会
https://www.geiyo.com/geiyo/index.html(参照 2023-09-12)
- 「近代高崎150年の精神 高崎人物風土記 大河内輝聲」高崎新聞
http://www.takasakiweb.jp/takasaki/gaku/jnbutsu/article/12.php(参照 2023-09-12)

群馬県出身の落語家

現在寄席に出演している
二ツ目・真打の落語家をご紹介します。

上州事変とは？
群馬県内全35市町村を巡り落語会を開催する落語家ユニット。



たてかわ だんしろう
立川 談四楼 (真打)

1951年生まれ。邑楽郡出身。70年立川談志入門。前座名「寸志」。75年二ツ目昇進。「談四楼」に改名。83年立川流真打昇進。



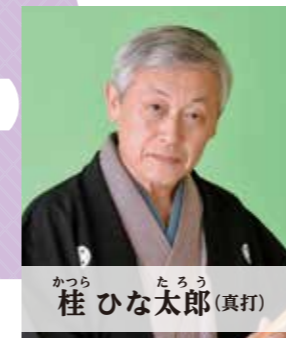
たてかわ だんのすけ
立川 談之助 (真打)

1953年生まれ。前橋市出身。74年立川談志入門。前座名「立川談Q」。78年二ツ目昇進。「談之助」に改名。92年真打昇進。



さんゆうてい りゆうらく
三遊亭 竜楽 (真打)

1958年生まれ。前橋市出身。86年三遊亭円楽入門。89年二ツ目昇進。92年真打昇進。



かつら ひな太郎
桂 ひな太郎 (真打)

1952年生まれ。安中市出身。77年古今亭志ん朝入門。前座名「志ん坊」。81年二ツ目昇進。「志ん上」と改名。93年真打昇進。2002年志ん朝他界に伴い、九代目桂文案入門。「桂ひな太郎」と改名。



しゅんぷうてい せいちょう
春風亭 勢朝 (真打)

1962年生まれ。伊勢崎市出身。79年春風亭柳朝入門。84年二ツ目昇進。96年真打昇進。



ここんてい いますけ
古今亭 今輔 (真打)

1970年生まれ。富岡市出身。94年古今亭寿輔入門。前座名「錦之輔」。98年二ツ目昇進。2008年真打昇進。六代目「古今亭今輔」を襲名。



かつら なつまる
桂 夏丸 (真打)

1984年生まれ。吾妻郡出身。2003年桂幸丸入門。07年二ツ目昇進。18年真打昇進。



ここんてい こまこ
古今亭 駒子 (真打)

1972年生まれ。甘楽郡出身。2003年古今亭菊千代入門。04年前座となる。前座名「ちよりん」。07年二ツ目昇進。18年真打昇進。「駒子」に改名。



はやしや つるこ
林家 つる子 (二ツ目)

1987年生まれ。高崎市出身。2010年林家正蔵入門。11年前座となる。15年二ツ目昇進。24年3月21日真打昇進決定。上州事変メンバー。



たてかわ がじら
立川 がじら (二ツ目)

1986年生まれ。前橋市出身。2011年立川志らく入門。16年二ツ目昇進。上州事変メンバー。



やなぎや こもん
柳家 小もん (二ツ目)

1990年生まれ。前橋市出身。2013年柳家小里ん入門。14年前座となる。前座名「小多け」。18年二ツ目昇進。「小もん」に改名。上州事変メンバー。



さんゆうてい ぐんま
三遊亭 ぐんま (二ツ目)

1985年生まれ。渋川市出身。2015年三遊亭白鳥入門。16年前座となる。20年二ツ目昇進。上州事変メンバー。

落語の基礎知識

林家つる子が解説する落語を見る前に知っておくこと



林家 つる子/Tsuruko Hayashiya
古典落語の滑稽噺から人情噺、新作落語にも取り組み、新しい目線から落語を描き直す試みにも意欲的で、古典落語「芝浜」や「子別れ」「紺屋高尾」の登場人物であるおかみさんや花魁を主人公にし、その視点から古典落語を描く挑戦は、NHK総合「目撃! にっぽん」、日本テレビ「NEWS ZERO」、「文藝春秋」等、各種メディアに取り上げられた。群馬県内の活動として、上州事変に力を入れている他、ぐんま観光大使、高崎アンバサダー、ぐんまの地酒大使を務める

噺の構成

噺はマクラ・本題・オチで構成されます。導入部分をマクラと呼び、観客が自然と噺の世界に入れるよう、世間話や本題と関連する話をします。噺の最後のセリフをオチ、またはサゲといい、シヤレや機転の利いたセリフで締めくくります。オチにはダジャレで落ちる「地口オチ」や、考えれば腑に落ちると言われています。

落語の階級とは

江戸落語には「前座」「二ツ目」「真打」、三つの階級があります。前座：見習い修業をし、楽屋入りか認められた人。寄席では最初に出演
二ツ目：前座の次の位で、寄席では二番目に出演。羽織やはかまの着用、自分の出囃子を持つことが許される
真打：「師匠」と呼ばれる最高位。弟子が取れる。一般的に昇進まで



演芸を行う舞台を指す「高座」。前座が次の演者のために準備することを「高座返し」と言い、メクリと呼ばれる演者の名前が書かれた紙を返したり、演者が入れ替わるタイミングで座布団を裏返して師匠の羽織や湯飲みを片付けたりします。「お客さまとの縁の切れ目がないように」とゲンを担いで、座布団は縫い目のない辺を客席に向けて置きます。

高座・高座返しとは

15、16年。寄席でトリを務める立場。昔はろうそくの火で演芸場を照らしており、最後に消した(=心をつた)ことが語源と言われている。

登場人物の演じ分け

顔や体の向きで複数の登場人物を演じ分けることを「上下を切る」と言います。身分の高い人物は下手(客席から見て左)を、身分の低い人は上手(客席から見て右)を向いて話します。子供は上目遣い、女将さんは襟元に指先を添える、侍は腰に手を当てりりしい顔をするなど、目線やしぐさも人物を表すのに重要です。



身分の高い人

身分の低い人

小道具の使い方

扇子と手ぬぐいは必需品。基本的にこの二つで、あらゆるものを表現します。



手紙を書く



扇子を筆に見立てて持ち、反対側の手は体の前に添え机を表現。目線に気を付けながら上から下へ向かって動かす。

蕎麦を食べる



箸で持ち上げ蕎麦の長さを見せるのがポイント。お腕を持つ手も崩さないように。

煙草を吸う



煙管に見立てた扇子をくわえ、灰や火種が落ちないように、袖に手を添える。

お財布



手ぬぐいでお財布を表現。銭や紙幣を取り出す際の指先の所作に注意。

着物着用について

男着物を着ます。女性の落語家は噺の登場人物に合わせて、着物を着る場合もあります。色や柄は落ち着いたものが多いです。二ツ目になると紋付の羽織やはかまの着用が許され、正式な場では一門の紋が入った着物を着ます。それ以外では、家紋や遊び紋の着物を選ぶ人もいます。



女着物

落語を楽しむためのポイント

気軽に聞きに来てほしいです。落語は難しく、予備知識がないと分からないかと思う人が多いかもしれませんが、そんなことはありません。だまされたと思って二歩踏み出して。服装も普段着で大丈夫です。「てやんでい！べらぼうめ！」といった江戸っ子口調は出てきますが、今の分かる言葉で話します。昔も今も笑う感覚や感動する気持ちと同じ。それを感ぜられるのが落語の一番の魅力です。

同じ噺でも落語家によって印象が違ってきます。最近では「推し活」という言葉をよく耳にしますが、寄席に通い自分好みの落語家を見つけるのも楽しみ方の一つ。「落語は難しいもの」と身構えずに、まずは気軽に落語に触れてほしいです！

Information 市内で行われる、県内出身の落語家が出演する寄席・落語会

シリーズ高崎寄席 よしい演芸館 2023 秋公演

【日時】10/29(日) 14:00開演(13:30開場)
【会場】吉井文化会館
【出演】春風亭柳雀(真打)、林家つる子、三遊亭花金、三遊亭ぐんま 入船亭扇ばい、林家喜之輔(紙切り)
【料金】全席自由 1,000円
【チケット】高崎市施設プレイガイド (右記QRコード)で発売中(電話・窓口のみ)
【問い合わせ先】吉井文化会館 TEL:027-387-3211



林家つる子落語会 其の拾式

【日時】11/11(土) 13:30開演(12:30開場)
【会場】高崎芸術劇場 スタジオシアター
【出演】林家つる子、江戸家猫八(特別ゲスト)
【料金】全席自由 2,500円(当日3,000円)
【チケット】高崎市施設プレイガイド (右記QRコード)で発売中
【問い合わせ先】林家つる子後援会 TEL:080-5910-5507



諸事万端を“笑い”に変える
粋な文化に魅せられて—

古今亭 駒子

吉井の夏の風物詩である「よいい演芸館夏公演2023」に出演した古今亭駒子さん。県内出身の落語家としては初の女性真打です。久々の凱旋となる駒子さんに、自身が落語家を志したきっかけや、落語の楽しみ方などをお聞きました。

古今亭 駒子/Kokontei Kōmako

1972年生まれ。群馬県甘楽郡甘楽町出身。群馬県立富岡東高等学校卒業、駒澤短大仏教科卒業後、会社員を経て2003年師匠古今亭菊千代に30歳で入門。04年3月前座となる。前座名は「ちよりん」。07年ニツ目に昇進、18年9月真打に昇進し、古今亭駒子と改名。東京都内寄席を中心に活動中。国内はもちろん、台湾の台南市、中国の北京市・天津市・広州市、タイのバンコクなど外でも定期公演を開催。出囃子は「テイドリーム・ピリパー」。落語協会所属。東京在住。



落語との出会いについて教えてください。

高校まで群馬県甘楽町に住んでいましたが、当時は今と違って映画館や演劇、ライブを見られるような場所が近くありませんでした。上京したことをきっかけに、自分の意志でいろんなものを見てみようと思ったんです。映画・演劇・お笑いライブなど、いろんな公演に足を運ぶ中で「寄席」に出会いました。会社勤めをしていた20代後半の頃です。落語はテレビなどで知ってはいたんですが、初めて訪れた演芸場は、ちょっと入りづらい場所がありました。入ると舞台の上に座布団があるだけ。出てきた人がその上に座って喋り出す。舞台と客席との距離が近いこともあって、話し手の人間性まで伝わってくるようで…。他にはない面白さを感じました。すっかり落語にハマってしまい、夜間、休日には寄席や落語会に足しげく通い、図書館で本やCDを借りるなどして楽しんでいました。メディアを通して見る生ものってお客さんにダイレクトに届きます。よしよしは本人が決められるところが良く、電波には乗せられない面白い世界に魅了されてしまいました。

落語家への道を決めた師匠・菊千代との出会い

寄席に通う中で、師匠の古今亭菊千

身の地域での落語会開催に、ぜひ挑戦してみたいです。

落語を楽しむ、ラクに生きる

落語の楽しみ方を教えてください。

自分が面白いと思ったら笑うこと！慣れていない人は、噺が難しいと思うかもしれませんが、私も寄席に通い出して間もない頃には「何でここで笑うの？」と思うことがありました。でも周りに合わせる必要はないですし、面白かったら笑っていいんです。だんだん面白さが分かると思うので、一度で判断せずに何度も聞いてみてください。「面白かった」と思っていただけのように一生懸命やりますので、未永く落語を楽しんでほしいと思います。

生活に与える落語文化の面白さや魅力とは。

表現するものに制限がないところで、人が想像するものには誰も規制が



代に出会いました。落語は話し手の内面がにじみ出るものです。特に古典落語は演者によって伝わり方が異なるところが醍醐味。同じ噺でも師匠の高座には優しい人柄がにじみ出ていて、人間性に魅力を感じました。「この人の弟子になりたい」という気持ちになりました。ありがとうございます。

私は入門を考えたのが30歳だったのですが、すごく悩みました。安定した収入が一切なくなるし、みんなが「食えないよ」という業界に入って良いものか。でもある朝、会社に遅刻しそうなって走っていたら肉離れを起こしたことがあったんです。激痛をこらえて出社して、ふと思いました。「今回は肉離れだからまだ良かったけど、事故や病気で死んでいたら？」って。落語家に挑戦しないままの人生だったらきっと後悔すると思う。「大変な道でも挑戦してみよう」と決めました。

入門前に師匠は、会う機会を何度か作ってくださいって、良かったことも苦しかったことも含めてこれまでに経験したことを丁寧に教えてくださいました。「決して楽な世界ではないけれど、気持ちが変わらないなら」と弟子にとってくれたんです。師匠にとって

できないじゃないですか。厳しい身分制度があった江戸時代に磨かれたこの演芸は、理不尽なことや辛いこと、悲しいことを全て「笑い」に変えてきました。本来は言えないことも、落語ならしやれの範囲で表現でき、楽しめる。そこが落語のすごいところで、一番の魅力です。

落語の噺には「自由な人」がたくさん出てきます。既成の価値観に縛られない彼らの生き方をお手本にしたら、学校でも仕事でも社会でも、今よりちょっとラクに生きられるかもしれません。落語からいろんな価値観を知ってもらいたいですね。

最後に、高崎の皆さんへメッセージをお願いします。

百聞は一見に如かず！落語を知らないのは人生で損してますよ。先人観にとらわれず、まずは一度見に来ていただきたいですね。そしてできるだけたくさん落語家を見ていただきたい。自分が予想していなかった面白さに出会えるところも、寄席の楽しみです。10月29日にはよいい演芸館の秋公演があります。ここには県内出身の林家つる子さんと三遊亭くんまさんが出演します。つる子さんは来年3月に真打へ昇進することが決まっていますので、ぜひ地元出身者の大きな門出を応援してください。皆さまのご来場をお待ちしております。



弟子は私一人だけなんです。一人前の落語家になってほしい気持ちがあるからでしょう。修業は本当に厳しかったです。噺はもちろん、楽屋のしきたりから礼儀作法に至るまで、親身になって教えてくれました。

女性師匠の元から女性真打が誕生するのは初めてだと伺いました。

そうですね。今でこそ、女性が社会で活躍することは珍しくありません。1993年に、うちの師匠が三遊亭歌る多師匠とともに、落語会初の女性真打となりました。そして2018年に、女性師匠(菊千代)が育てた女性の弟子(駒子)が真打に昇進したことは、落語界にとって大きな出来事、すごいチャレンジだったと思います。

実は昔から、頑張っていた女性の落語家はたくさんいました。結婚などの諸事情から志半ばで辞めてしまい、記録にはほとんど残っていないんです。私が真打になったとき「駒子」と改名しましたが、これは昔、実際に活躍した落語家の名前なんです。師匠

は、五代目・古今亭志ん生の孫弟子にあたりますが、その志ん生師匠の弟子に「金原駒子」という高座名の人がいたんです。師匠たちが、女性落語家の真打昇進という前例を作ってくれましたが、それ以前にも奮闘した人たちがいた。有名無名含め、頑張ってこられた女性落語家への敬意を込めて、「駒子」という名をもらいました。

高崎市で育む落語文化

本日の公演を含め、地元での落語・寄席についての印象は。

今日のお客様は、とても雰囲気良かったですね。一人目の「マクラ」から明るく笑う声が多くて、落語を理解されているなと感じました。毎年公演を続けてきたこと、お客様が聞き続けてくれている証だと思います。

江戸落語はお座敷やまちごとの寄席から発展してきた歴史があるので、大きなホールに加えて、地域での寄席や小規模な落語会が増えたらいいですね。舞台と客席の距離が近くなるとお客様の顔が見え、客席を巻き込んだり大きな声では言えない話なんかを挟んだりできて、本来の寄席を感じる事ができます。

落語会を開催するって案外簡単なんです。地域の活性化にもつながりますし。私も呼んでもらえたら喜んで行きます(笑)。落語好きな人は、ご自



▲開局前後に作成された当時のちらし。放送内容や番組表、放送エリア、番組制作費やスポットCMの料金も掲載されている

高崎市がPRイベントをする際には、ラジオの中継ブースを設置して特別番組を作ることもあります。「高崎まつり大花火大会」や「榛名山ヒルクライム in 高崎」ではYouTube配信を、高崎芸術劇場とコラボした「T・S・H・o・t・シ・リ・ーズ」では演奏会を

ラジオ局の大きな役目は防災です。防災放送ばかりでは緊急時にチャネルを合わせていただけません。そこでエンタメ要素のある番組や地元高崎の皆さんの活躍を紹介する番組を放送し、日頃からラジオに親しんでほしいと思っています。スタッフも少人数で小さな会社ですが、みんな、高崎のことが大好きで、地域に密着した多様な取り組みを行っています。特に放送される番組は90%以上がオリジナル番組で、コミュニティFMとして高崎の情報発信にこだわっています。

25年間、振り返ってみるといろんな変化がありました。例えば、取材の時に使う録音機材もずいぶん様変わりしましたね。昔はDATという肩掛けの機械にマイクをつないで取材してい

25年間の放送を支える技術の変遷

また、NHKの番組「ほっとぐんま630」ではラジオ高崎の生放送中のスタジオと連携した放送を行っています。近年、ラジオが見えるようになってきて、新たなリスナーさんが増えました。ラジオ放送しかなかった26年前に比べて、いろんなことができるようになったと思います。コロナ禍でもラジオは強かったです

日常に寄り添う地域のラジオ局

ラジオ局の大きな役目は防災です。防災放送ばかりでは緊急時にチャネルを合わせていただけません。そこでエンタメ要素のある番組や地元高崎の皆さんの活躍を紹介する番組を放送し、日頃からラジオに親しんでほしいと思っています。スタッフも少人数で小さな会社ですが、みんな、高崎のことが大好きで、地域に密着した多様な取り組みを行っています。特に放送される番組は90%以上がオリジナル番組で、コミュニティFMとして高崎の情報発信にこだわっています。



田野内 明美/Akemi Tanouchi
株式会社ラジオ高崎執行役員放送局長、アナウンサー。1997年の開局と同時に音楽番組を担当し、以降さまざまな番組に出演する。ラジオ高崎夕方の帯番組「Air Place」は、番組開始時から企画、プロデュースとして関わり、自らパーソナリティーも務める。心地よく個性的で、ゆったりと刺激的な番組づくりがモットー。最近では、イベント司会のほか、講演、テレビ番組のナレーションなど、活躍の場を広げている。2021年10月から高崎市教育委員。

「防災情報局としてのラジオ高崎」

ラジオ高崎の開局は1997年の4月1日。1995年、阪神淡路大震災でのコミュニティFMの活躍をきっかけに、災害情報局として誕生しました。県内ではラジオ高崎を皮切りに、FM OZE、エフエムきりゆう、まえばしCITYエフエム、エフエム太郎、ラヂオななみ、いせさきFMが開局。災害時には「群馬県コミュニティ放送協議会」として連携し、7局一丸となって防災情報を発信する体制を整えています。

高崎市とも連携し、防災や気象、火



オーバ外壁ビジョンで生放送の様子を放映



高崎駅構内サテライトスタジオでの放送

緊急地震速報受信時のコメント



開局当時のラジオ高崎(1997年)



毎週月～金曜、午後4時から放送の「Air Place」では日替わりでゲストが登場



榛名山ヒルクライム in 高崎の実況放送(2023年)



地域の暮らしに“声”で寄り添う

コミュニティFM 「ラジオ高崎」

1992年の第一号放送局の開局以来、全国300局以上へ局数が増えているコミュニティFM。他メディアと比較して、電力エネルギーの消費量を抑えながら地域の情報を伝達できるラジオは、災害時に力を発揮する媒体として注目されています。

1997年に開局した「ラジオ高崎」は、防災情報から生活情報まで地域に根差したコミュニティFM局として四半世紀にわたって市民に愛されてきました。今回は開局以来活躍されている同局アナウンサーの田野内明美さんに、ラジオ高崎のこれまでとメディアから見た高崎市についてお話をいただきます。

ね。緊急事態宣言が出た時にはリモート放送を行い、通常時と変わらない放送をお届けすることができました。最近ではゲスト側が機材を新調したり、使用するソフトが良くなったたり、スタジオ収録に近い音質で放送できています。一方で、良いか悪いか……ゲストからは「ロケを理由に収録を休めなくなった」と言われます。スタジオに来なくても、場所を選ばず収録ができるので「どこまでも追いかけてくるラジオ高崎」なんて言われていますね。

田野内アナとラジオの出会い

ラジオ高崎の開局前、私は会社員として仕事をしていました。ラジオに関わり始めたきっかけは、ラジオ高崎の実験放送時にボランティアとして、関係者と一緒に数か月ラジオを放送したことです。当時は録音取材やインタビューを担当していて、喋る機会はありませんでした。ただ、実験放送局の終了間際に、高崎映画祭を立ち上げた茂木正男さんと2時間のトーク番組を作ったことがあります。その時初めてラジオで話す機会があって、やり取りする楽しさを知りました。

ボランティア終了後、ラジオ高崎開局のタイミングで再び声をかけてもらってアルバイトを始めました。毎回ゲストを招くことを条件に、2時間自由に番組を制作。週3日の放送が週5

日放送になり、そこからずっとラジオ高崎に勤めています。今ではほとんどありませんが、一人で機械の操作しながらゲストと喋るという濃い経験もしました。自分の放送や他の人のラジオ放送を聞き比べながら、聞きよう、聞きまねで勉強してきました。現在の基礎となっています。

人の手が育てるまちとラジオ

放送に携わって感じることは、高崎はすごくエネルギーが豊富なまちだということです。県外の人は毎週末イベントがあることに驚きますし、私も特番の取材などでまちの熱い思いを受け取っています。まちを楽しくする力、まちを訪れる人へのおもてなしの力が年々高まり、注目を集めているように感じます。

現在メインで担当しているのは、平日の16時から19時まで生放送でお届けしている「Air Place」です。群馬県や高崎市にゆかりのある人をゲストに呼んでお話を伺うスタイルで放送しています。ゲストはSNSに写真や放送内容をアップして、高崎を発信してください。番組を通じて外とのつながりができたことが、ラジオを通じて高崎を知ってもらえる良い機会になりました。今後もそういった番組を作って、多くの人に高崎のことを広く知ってほしいと考えています。

10月からは新番組「高崎モノめぐり」

が始まります。これまで市内の食を紹介してきた番組「高崎グルメめぐり」と同じシリーズで、ものづくりの職人にスポットを当て、技術や商品を紹介する予定です。取材をしていると「人の力でまちができていく」と感じますし、このまちの皆さんに育てていただいたラジオ局であることを実感します。

幅広い世代に愛され聴く人を笑顔にするラジオで

最近では、子どもたちがラジオに関わ


る取り組みも増えていきます。日曜日の番組「わいわいスポーツキッズ」にはスポーツを頑張っている子どもたちが登場。子どもたちにアナウンサーを体験してもらえ、「子どもアナウンサー教室」も、年に一度開催しています。中学生の職場体験「高崎市やるベンチャーウィーク」も積極的に受け入れています。生徒たち自身が企画から演出まで考える番組作り体験は特に好評。実際にラジオで放送するので、生徒たちからは「これまで経験したことのない達成感」との感想をもらっています。

幅広い世代の皆さんにリスナーとしてラジオに親しんでもらうことはもちろんのこと、ぜひたくさんの人に番組に出演してもらいたいと思っっています。皆さんからの「出演して楽しかった」「自分の思いを語れた」という声を大切にしています。

ラジオ高崎はこれからも、いざという時の防災・災害情報の発信に備えながら、地域の皆さんが何気ない毎日を穏やかに、笑顔で過ごせるような放送をお届けしていきます。


ラジオ高崎の歩み

- 1995年 1月17日 阪神・淡路大震災
- 1997年 4月1日 ラジオ高崎開局
- 2002年 4月 夕方の生放送番組Air Place放送開始
- 2003年 8月1日 サテライトスタジオCOCOAをJR高崎駅西口に開設
- 2009年 3月1日 倉渕中継局開局
- 2011年 4月26日 高崎駅構内サテライトスタジオをJR高崎駅東口に開設
- 2011年 3月11日 東日本大震災
- 2013年 5月18・19日 第1回榛名山ヒルクライム in 高崎(ハルヒル)開催
- 2013年 5月17日 ラジオ高崎スマートフォン専用アプリ配信開始
- 2016年 4月16日 熊本地震
- 2017年 4月 開局20周年を迎え、Air Placeを大幅リニューアル。県内外で活躍するタレント、アーティストがパーソナリティに
- 2017年 10月13日 高崎オーパ内にメディアスタジオを開設
- 2019年 10月 令和元年台風第19号
- 2020年 9月1日 高崎市役所内に送信所を移転
- 2020年 10月23日 ラジオ高崎公式アプリをリニューアルして配信開始
- 2021年 7・8月 東京2020オリンピック開催
- 2022年 4月 開局25周年を迎える



76.2 RADIO TAKASAKI
JAZZ/POP/FUNK/ROCK/STEREO

株式会社ラジオ高崎
高崎市八島町26 TEL.027-322-5555



ON AIR 高崎財団の関連情報をラジオ高崎で発信しています!

大友直人のClassical Anatomy

高崎芸術劇場 大友直人芸術監督が、独自の音楽芸術感でオーケストラや劇場公演などを徹底的に解剖します

●毎週金曜10:30~10:45 【再放送】土曜20:00~20:15、日曜18:15~18:30、火曜19:15~19:30

劇場都市AIR

高崎芸術劇場の注目公演の見どころ・聴きどころを紹介しています

●毎週金曜19:00~19:15(第2・4週は再放送) 【再放送】水曜6:30~6:45

パーソナリティ
田野内 明美



ギャラリートーク

高崎シティギャラリー展示室の情報をお届けしています

●毎週土曜9:15~9:29 【再放送】日曜10:30~10:44

パーソナリティ
大江 響子



専用アプリはこちらから



ラジオ放送だけでなく、高崎市の防災情報や気象情報もリアルタイムで発信しています。ぜひ、ご利用ください。

防災メディアとしての存在感

私は東日本大震災の時、東京のラジオ局でパーソナリティを務めていました。どの避難所でもラジオが流れていて、みんなで「避難所にいる人たちへ何を伝えよう」と話したことを覚えています。

ラジオ高崎は市民の皆さんが大切な情報を得るための情報網ですよ。最近では地震や台風などの災害が多いので、まちの防災メディアとしての存在感が増していると感じます。

ラジオがつくる、人との出会い

初めて「ラジオ高崎」に出演したのは10年ほど前。ライブのプロモーションで出演し、それから番組「Air Place」のゲストパーソナリティへお誘いいただきました。高崎はライブで頻りに訪れていましたが、パーソナリティとして月に一度訪れるのも楽しいです。特にさまざまな分野の専門家にお話を聞く番組「大人の学校」では、多くの出会いや発見があります。リスナーの皆さんも含め一人一人と向き合いながら話すことを大切にしています。

JILLさんが見つけた高崎の魅力

高崎はバンド活動が盛んで、音楽好きが多いイメージ。個人的には高崎芸術劇場がお気に入りです。自然が豊かで文化施設が身近なまちの特徴を活かして、さらにクリエイティブなものが生まれてほしいと思います。

先日はラジオ高崎のイベントとして東京でトーク&ライブを行いました。スタジオを飛び出して高崎のことを伝えることにも積極的に取り組んでいます。音楽活動で全国を巡っていますので、これからも各地で高崎をアピールしていきたいですね。まちなかによくいますので、見かけたら気軽に声をかけてほしいです。

番組ゲストパーソナリティ JILLさんからのメッセージ



JILL/ジル
PERSONZのボーカリスト。1984年JILL、本田毅、渡邊貢、藤田勉でPERSONZを結成。1987年にティクBAIDISレーベルより1stアルバム「PERSONZ」でメジャーデビュー。1989年にはタイアップの走りとなるTBSドラマ「ママハハブギ」に「DEAR FRIENDS」が起用されると、そのPOPかつストレートでメロディアスなサウンドは爆発的に日本中に伝わった。コロナ禍でのライブやツアーの延期や中止を乗り越えて、2024年の結成40周年を目指し邁進中。
ソロ活動として2017年、和楽器ユニット「三味線JILL屋」を結成。衣装のデザインやリメイク、ミニMVの制作など、クリエイターとしての才能も発揮している。ラジオ高崎「Air Place」にレギュラー出演中(毎月第1水曜日)。

MESSAGE



桂二葉 高崎落語会

10/15(日)14:00開演
【スタジオシアター】

【出演】桂二葉、桂雀太(ゲスト) ほか
【料金】全席指定 2,500円 完売御礼



ミュージカル『スリル・ミー』

10/21(土)12:30開演/16:30開演
10/22(日)12:30開演
【スタジオシアター】



【出演】21(土)12:30開演 尾上松也(私役)、広瀬友祐(彼役)
16:30開演 木村達成(私役)、前田公輝(彼役)
22(日)12:30開演 松岡広大(私役)、山崎大輝(彼役)
【料金】全席指定 9,500円 完売御礼

高崎芸術劇場 大友直人 Presents
T-Shotシリーズvol.11
荒木奏美 オーボエ・リサイタル

10/26(木)13:30開演【音楽ホール】
【出演】荒木奏美(オーボエ)、秋元孝介(ピアノ)
【曲目】モーツァルト/ソナタ ヘ長調 K.13より第1楽章
ドヴィエンヌ/ソナタ 第2番 二短調 Op.71
R.シューマン/3つのロマンス Op.94
ドラニシニコワ/ボエム
A.バスクリ/椿姫の楽しい思い出 ほか
【料金】全席指定 2,000円



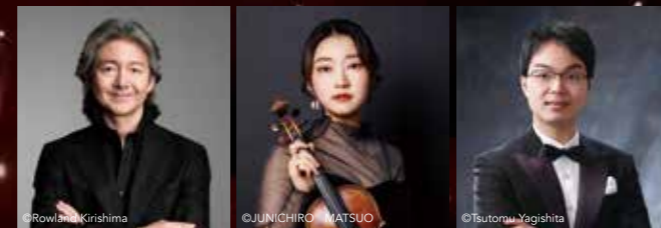
日本全国 能楽キャラバン!
観世流 高崎特別公演

10/26(木)14:00開演【スタジオシアター-能舞台】



【出演】能「松風」観世清和(二十六世観世宗家)、狂言「昆布売」野村万作(人間国宝)
半能「石橋」観世三郎太・下平克宏
【料金】全席指定 S席 10,000円 A席 8,000円 B席 5,000円 学生 2,000円

群馬交響楽団×高崎芸術劇場
GTシンフォニック・コンサート vol.4
『ザ・ベートーヴェン2』



【出演】大友直人(指揮)
戸澤采紀(ヴァイオリン)*、小林海都(ピアノ)**、群馬交響楽団
【曲目】オール・ベートーヴェン・プログラム
ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.61*
ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 Op.73「皇帝」**
【料金】全席指定 S席 5,000円(U-25 2,500円)
A席 4,000円(U-25 2,000円) B席 3,000円(U-25 1,500円)

ポローニヤ歌劇場
プッチーニ『トスカ』

11/7(火)18:30開演【大劇場】



【出演】マリア・ホセ・シーリ(トスカ)
フランチェスコ・ピオ・ガラツソ(カヴァラドッシ)
マッシモ・カヴァレティ(スカルピア)
オクサーナ・リーニフ(指揮)、ポローニヤ歌劇場管弦楽団/合唱団
【料金】全席指定 SS席 24,000円 S席 19,000円 A席 15,000円
B席 11,000円 C席 7,000円(U-25 5,000円)
車椅子席、介助席 15,000円

EGO-WRAPPIN'

11/12(日)18:00開演
【スタジオシアター】

【出演】EGO-WRAPPIN', guest DJ 須永辰緒 ほか
【料金】1階 6,600円(オールスタンディング・整理番号付)
2階 7,400円(指定席)



高崎芸術劇場 大友直人 Presents
T-Shotシリーズvol.12
北村明日人 ピアノ・リサイタル

11/16(木)13:30開演【音楽ホール】
【出演】北村明日人(ピアノ)
【曲目】J.S.バッハ/イタリア協奏曲 BWV 971
モーツァルト/ピアノ・ソナタ 八長調 K.545
ブラームス/4つの小品 Op.119
ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ 第8番 八短調 Op.13「悲愴」
グリーグ/ホルベルク組曲 Op.40
【料金】全席指定 2,000円



Char Live Tour 2023

11/17(金)19:00開演【スタジオシアター】
【出演】Char(ギター、ヴォーカル)
澤田浩史(ベース) ほか
【料金】全席指定 9,500円



宝塚歌劇
花組全国ツアー高崎公演

12/5(火)13:30開演/18:00開演【大劇場】

【出演】宝塚歌劇団花組(主演) 永久輝せあ
【演目】ミュージカル・プレイ『激情』-ホセとカルメン-
ネオ・ロマンチック・レビュー『GRAND MIRAGE!』
【料金】全席指定 S席 8,300円
A席 5,500円 B席 3,000円 完売御礼



フォーレ四重奏団

12/9(土)14:00開演【音楽ホール】

【出演】エリカ・ゲルトゼツァー(ヴァイオリン)
サーシャ・フレンプリング(ヴァイオラ)
コンスタンティン・ハイドリッヒ(チェロ)
ティルク・モメルツ(ピアノ)
【曲目】ブラームス/ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 Op.25
ムソルグスキー(グルスマン&モメルツ編)/
組曲「展覧会の絵」
【料金】全席指定 5,000円(U-25 2,000円)



群馬交響楽団×高崎芸術劇場
GTシンフォニック・コンサート vol.5
『オペラ・ガラ・コンサート』

12/21(木)18:30開演【大劇場】



【出演】沼尻竜典(指揮)、砂川涼子・砂田愛梨(ソプラノ)、宮里直樹(テノール)
高田智宏・池内響・清水良一(バリトン)、妻屋秀和(バス)
GTシンフォニック・コンサート・プロフェッショナル・シンガーズ(合唱)
岸本大(合唱指揮)、澤村杏太郎(音楽アシスタント)、群馬交響楽団 ほか
【曲目】プッチーニ/『ラ・ボエム』第1幕後半~第2幕
ヴェルディ/『アイダ』から「凱行進行曲」ほか
【料金】全席指定 S席 5,000円(U-25 2,500円)
A席 4,000円(U-25 2,000円) B席 3,000円(U-25 1,500円)

第34回 高崎元旦コンサート

2024/1/1(月・祝)13:30開演【大劇場】



【出演】大友直人(指揮)、高野百合絵(ソプラノ)
岡本誠司(ヴァイオリン)、阪田知樹(ピアノ)
【曲目】ジューズスキー/ウィーン、わが夢の街
サラサーテ/ツイゴイネルワイゼン
グリーグ/ピアノ協奏曲 イ短調から ほか
【料金】全席指定 S席 5,000円 A席 4,000円 B席 3,000円(U-25 1,500円)
【チケット発売】
Web 9/29(金)10:00~ 電話 10/3(火)10:00~ 窓口 10/4(水)10:00~

高崎芸術劇場 大友直人 Presents
T-Mastersシリーズvol.7
伊藤恵 ピアノ・リサイタル

2024/2/25(日)15:00開演【音楽ホール】

【出演】伊藤恵(ピアノ)
【曲目】ベートーヴェン/
ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 Op.109
ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 Op.110
ピアノ・ソナタ 第32番 八短調 Op.111
【料金】全席指定 S席 5,000円 A席 4,000円(U-25 1,500円)
【チケット発売】
Web 10/20(金)10:00~ 電話 10/24(火)10:00~ 窓口 10/25(水)10:00~



第22回 高崎演能の会

2024/2/11(日)【スタジオシアター-能舞台】



【演目】能「山姥」(観世流) ほか

群馬交響楽団×高崎芸術劇場
GTシンフォニック・コンサート vol.6
『映画音楽名作選』

2024/3/9(土)14:00開演【大劇場】

【出演】竹本泰蔵(指揮)、笠井信輔(ご案内)、群馬交響楽団 ほか
【曲目】交響組曲『レ・ミゼラブル』から
映画「カサランカ」(映像付き) ほか
【料金】全席指定 S席 5,000円(U-25 2,500円)
A席 4,000円(U-25 2,000円) B席 3,000円(U-25 1,500円)
【チケット発売】
Web 12/8(金)10:00~ 電話 12/12(火)10:00~ 窓口 12/13(水)10:00~



人形浄瑠璃・文楽

2024/3/未定【スタジオシアター】

チケット取扱い ※U-25料金は公演当日25歳以下の人が対象です ※車椅子席・介助席の購入は高崎芸術劇場チケットセンターまで電話でお申し込みください

Web 24時間受付 受付開始日の10:00~
■高崎芸術劇場メンバーズ (登録無料)

電話 10:00~18:00
■高崎芸術劇場チケットセンター
027-321-3900(無休)

窓口 高崎市施設プレイガイド(窓口発売日の10:00~)
■高崎芸術劇場(2Fチケットカウンター)(10:00~18:00) (無休)
■群馬音楽センター 月休 (8:30~17:15)
■高崎市文化会館 月休 (8:30~17:15)
■高崎シティギャラリー 無休 (8:30~17:15)
■箕郷文化会館・新町文化ホール・榛名文化会館・吉井文化会館 月・火休 (8:30~17:15)
■高崎市倉沢支所(地域振興課)・高崎市群馬支所(地域振興課) 土・日・祝休 (8:30~17:15)

Meet The

GUNMA SYMPHONY ORCHESTRA

GSO

Special

Vol. 12

70年以上脈々と引き継がれる群響サウンド
それを奏でる個性あふれるメンバーを紹介します

群馬交響楽団YouTubeチャンネル(右記QR)
楽団員紹介コーナー「群響ダイアログ」もぜひご覧ください



群馬交響楽団

コンサートマスター

福田 俊一郎

時に主役となる軽やかなメロディーを奏で、時に重厚な伴奏で曲の支え役を演じる。「多彩な役割を担えるのがこの楽器の魅力の一つ」。そう語るのは、ヴァイオリニスト・福田俊一郎さん。今年4月に群馬交響楽団のコンサートマスター(以下、コンマス)に就任した。

生家が祖父から父へと受け継がれている弦楽器の弓を専門に扱う工房があったこともあり、いつも身近に楽器があった。2つ上の姉の影響で、ヴァイオリンを始めたのが3歳のとき。後に妹も加わり、きょうだいそろって、仲むつまじくも競い合いながら、練習に励む子ども時代を過ごした。

恩師との出会いが育んだ音楽の礎

中学生のときに参加した講習会の講師の紹介で、関西在住のヴァイオリニスト・小栗まち絵氏に出会った。音楽にかける愛情に感銘を受けて師事。演奏の技術や曲作りはもちろん「生活面や日々の過ごし方」にまで及ぶきめ細かな指導で、音楽への向き合い方を学んだ。

普通高校に進学したが、ヴァイオリンのレッスンは欠かさず、音楽家への夢を抱き続けていた。受験勉強に本腰を入れる友人たちとは一線を画し、毎年、海外のマスタークラスに参加。音楽への思いはますます高まり、東京音楽大学に入学した。ここでは、ヴァイオリニストの大谷康子氏に師事。音楽をとにかく楽しんでいる印象が心に響いた。大学の授業で初めてオーケストラを経験したが、コンマスの勉強法や指揮者との関わり方など、大学時代を通して指導を仰いだ。

オーケストラならではの面白さ

大学時代には、学外のオーケストラにエキストラ出演することもあれば、4年生のときに、8つの音楽大学合同のオーケストラに参加する機会に恵まれ、コンマスの大役を務めた。マーラーの交響曲第6番とい

う演目も初めて。自身の音楽人生を振り返っても、強く印象に残る経験の一つだ。一人では味わえない経験、色んな音楽との関わり方ができるところが魅力。「みんなで曲作りに向き合い、一つの曲を奏でるオーケストラの醍醐味を知った」。

聴衆の期待に応える演奏会を

東京音楽大学大学院を首席で卒業。その後、在学中にゲスト出演したことが縁で群響から声がかかり、入団が実現した。「高崎は気さくな人が多いまち。演奏会のお客様からは群響への期待や温かなまなざしを感じる」。楽団については「音楽に対して反応が素直」とその印象を語る。指揮者やソリストの表現したい音楽への共感が、団員の表情や演奏に表れているという。

7月の第590回定期演奏会では、入団後初のコンマスを務め、確かな手応えを感じた一方で、課題も見いだせた。「どの演奏会でも『今回はここが良かった!』と言ってもらえるオーケストラを目指す。楽団員の演奏や調子をしっかりと見ながらコンマスの役割を果たしたい」。奏者一人一人が思い描く「音」をどうまとめ上げていくのか。群馬交響楽団「新生」コンサートマスターの挑戦に期待は高まる。

「指揮者の想いとオーケストラの音色をつなぎ、

お客様に響く演奏会を目指して」



福田 俊一郎
Shunichiro Fukuda

■出身 神奈川県
■入団 2023年4月

■印象に残っている最近の演奏会

「第44回森とオーケストラ」(2023.4.29)。初めての野外コンサートで開放感のあるステージでの演奏は良い経験になった。お客様もリラックスして楽しんでいたのでとても印象的だった。

■好きな指揮者

クラウス・マケラ、リッカルド・ムーティ

■好きな作曲家

マーラー、ブルックナー、ブラームス、R.シュトラウス

